タイトル：平成 25（2013）年度　研究セミナー
日程：平成 25 年 12 月 13 日（金）～15 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階　マルチメディアセミナー室（306）

「私の博士論文」
藤波　伸嘉（AA 研研究機関研究員）

恒例となっている「私の博士論文」ということで、以前受講生として参加した際には聞く側だったのだが、今回は恐れ多くも話す側に回ることとなった。錚々たるスタッフの先生方や、博士論文執筆を控えた前途有望な受講生の方々の前で、私などの博士論文執筆過程を話すなどというのは荷が重すぎる仕事であったが、あくまで他山の石とでもしてもらえれば、という気持ちでお引き受けする運びとなった次第である。

今回は、博士論文執筆への道のりを追体験してもらうことを主眼に、できるだけ時系列に沿って、直感的で萌芽的な問題関心を如何にして学問的な成果に結び付けていったのか、学部生や院生時代の周囲の学問状況が如何に今に至る研究生活に影を落としているのか（あるいはいないのか）、この間の日本、トルコ、ギリシア、そして英語圏の研究動向や研究環境の変化に如何に対応してきたのか（あるいは対応できなかったのか）、という点を中心とした。その際、自分の狭義の専門に留まらず、近接する分野や地域や時代を扱う研究を常に摂取すべきこと、また、博士論文提出後に速やかに新たなテーマに取り掛かれるよう、執筆中から、博士論文で扱うテーマ自体がその中に位置付けられるような、より大きな文脈を意識しておくべきことを説いた。その意味で今回の話は、私の博士論文をいわばダシにして、狭くは近代オスマン史研究の趨勢、広くは歴史学や人文諸学の研究潮流の趨勢を、90 年代から現在に至る文脈の中で再確認する作業となっていたのかとも思う。

ただし、正にそのために、全体に話がやや抽象的な内容となり、実際の博士論文執筆過程における卑近かつ具体的な論点―睡眠時間であるとか、留学中の日常生活であるとか、史料や先行研究のパソコン上での整理方法であるとか、雑誌投稿論文と博士論文との兼ね合いであるとか、起筆後の具体的な執筆順序であるとか、家事との両立であるとかいったこと―に余り触れられずに終わってしまったのは反省点である。とはいえ、この辺りの論点については、スタッフの先生方の誘導尋問のお蔭もあって、ある程度は質疑応答の場で補足できたかとは思う。また、今回のような時系列的な語りは、回顧的視座によって過去を合理的に解釈化し過ぎるという弊害を伴っていたかもしれない。

更に言えば、私はあくまで近代オスマン史専攻の歴史学者という立場からしか話をすることができなかったので、必ずしも歴史学専攻ばかりではない受講生の方々にとって、人文学に特化した今回の話がどれほど有益だったのか分からないし、また、―連日の「夜の部」で期待されていたような―世俗的な人間関係の機微にわたる話は余り織り込めなかったので、総じて些か窮屈な報告となってしまったかもしれない。いずれにせよ、私が受講生として拝聴した時の「私の博士論文」が大変に面白くてためになるものだったことと比べると、余り面白くもない話を聞かされた今年度の受講生の方々は不運であったと思わざるを得ないが、受講生の方々には、今回の話自体を一種の史料批判の対象として、各々の博士論文

執筆に向けた何らかの刺激としてもらえたのであれば、これに勝る幸いはない。